

Z世代の視点・特色を活かした画期的な防火広報



兵庫県 姫路市消防局

事例類型 I 実効性向上 / IV 他団体との連携 / VI 広報活動

取組期間 令和 5 年 5 月から

背景

- 我々消防行政は、火災予防の情報をポスターやウェブサイト等を通し、随時地域住民に対し発信している。しかし、堅い広報から脱却しきれず、情報の到達力・拡散力には課題がある。特に、我が国の総人口の約3割を占める高齢者にはITを活用した情報の受信手段が乏しく、そこにどのようにアプローチするかは喫緊の課題であると考ええる。
- そのような中で、当局では、「孫は子より可愛い」といわれることから、「孫の声を直接高齢者に届けることで住宅用火災警報器の設置を含めた火災予防の情報が到達するのではないか」と考えた。
- また、それだけに留まらず、幼い頃からSNS等で自身の情報を発信することが当然の文化の中で育った孫世代、いわゆるZ世代なら、我々消防が思いもつかない広報の手法を編み出し、より多くの地域住民に情報を届けてくれるのではないかと考えた。
- しかし、これを行うためには、大きな課題が立ちはだかった。それは、火の取扱いが未熟なZ世代に火災の知識や火災予防の大切さを理解してもらうだけでなく、「これからは自分が大切な人を守る」という大きなマインドシフトをしてもらうことである。
- 今回の取組は、Z世代である高校生に対し行った防火教育から始まり、その後、Z世代が自身の視点や特色を活かし、家族・祖父母だけでなく、地域住民を守るために行った防火広報について記述するものである。

内容

- 令和5年5月、当局の管轄区域に所在する高等学校に上記内容を説明し、年度を通した火災予防の取組を行う「防火プロジェクト」の立ち上げが決定。
- 同年6月、同校の全校生徒約700人に対し火災予防に関する授業を実施。火災の恐怖や、火災予防の大切さを伝えるとともに、「今日学んだことを家族・祖父母に必ず伝え、自分が大切な家族を守ること。」、そして、「それに留まらず地域の人達を守るための『防火プロジェクト』と一緒に取り組もう。」とマインドシフトを訴えた。
- その後、生徒達が授業内容を実際に祖父母を含めた家族に伝達。有志約50人が同プロジェクトへの参加を表明した。
- 同年7月から11月までは月に1～2回、同プロジェクトメンバーに対して授業を継続的に行うとともに、Z世代にしかできない火災予防広報についての協議を重ねる。その際、消防側から生徒に対して実施内容の要望は一切行わず、Z世代の視点・特色を最優先した作品づくりを実現できるようにした。

- 同年10月から同プロジェクトの本格展開開始。
プロジェクトの主な実施内容:生徒達自身で考案し書いた標語を消防車・救急車へ掲出、大型書道を市内最大ショッピングモールに展示、アニメーション製作及びSNS展開、火災予防に関する吹奏楽演奏講演等。
- 同年11月、地域住民に上記内容を披露するイベントを実施。



成果

- 学校側へのアンケートの結果、約7割の生徒が「火災予防の授業を受けてよかった」と回答するとともに、「家族・祖父母に授業内容を伝えた」と回答。さらに、自らが住宅用火災警報器を取り付けする等の行動を行った生徒も現れ、一定のマインドシフトの成果が認められた。
- 同プロジェクトメンバーは、火災予防に関する授業だけでなく、自主学習を積み重ね、発信力の高い作品作りを行った。作品制作の過程で、高校生の口から「総務省消防庁が発信している消防白書を読んで勉強した。」「統計を分析し、対応方法を調べた。」という発言があり、我々消防側が感嘆するモチベーションとなった。
- 同プロジェクトは延べ8社の報道機関に取り上げられ、地域住民数十万人にプロジェクトの意義や火災予防の情報が到達した。それに伴い、高齢者を含む地域住民からプロジェクトに関する問い合わせや火災予防に関する質問もあった。
- 同プロジェクトをSNSでも展開し、約50万人が視聴した。
- 11月に実施した火災予防イベントでは観客数1,000人以上を記録。プロジェクトメンバー全員がステージ上で、自らの声で火災予防を訴え、作品を披露した。
- 地域住民に情報が到達した影響から、今回のプロジェクトを立案した消防署管内の令和5年中の火災件数は昨年比マイナス13件(約31%減)、火災死者数は0人(昨年比マイナス4人)を記録した。

特記事項

- Z世代の影響力は想像を超える大きさと、我々消防は踏襲された固定観念にとらわれすぎることなく、新たな視点や特色を今後も十分取り入れていかなければならないことを実感した。
- これからの未来を担うZ世代に対する火災予防の教育は、彼らの未来の命を救うだけでなく、全世代の命を救うものとなるという大きな相乗効果が認められた。